くさほにかけてとをるをみて、歌よめとあれば、かんかりやうつかりかねとはしたがにとられて後も棹になれ〳〵、犬子集、舟にのれ棹になりつゝかへる雁、重次狂歌咄、棹になりて夜すがらわたるくらかりの空に云々、松の落葉、近江八景、ひら〳〵とむれゐる雲に、さほになりてとをろあとながさきへ、さきながあとなら、かうがいとらしよ、○略中仲實の歌に、そらいろによそへることのはしらをばつらなる鴈とおもひけるかな、江戸の童は、がん〳〵みつくちといふ、みつ口とは琴柱の形になるをいひ、かうがいは釵をもいふ、是も琴柱の形なる物故、取出ていへるにや、

〔就狩詞少々覺悟之事〕一射まじき鳥の事、○略中鴈、

〔雍州府志六土産〕鴻雁　洛外於所々竊執之賣市中、黑鶴亦飼之、應人之需而賣之、

〔新撰字鏡〕鵠胡穀反、黃鵠、久比、又古比、

〔段注說文解字四上鳥〕鵠黃鵠也、黃各本作鴻、今依元應書李善西都賦注正、戰國策黃鵠游於江海、淹於大沼、奮其六翮而陵清風、賈生惜誓曰、黃鵠一舉兮知山川之紆曲、再舉兮知天地之圜方、凡經史言鴻者皆謂黃鵠也、或單言鵠、或單言鴻、鵠从鳥告聲、胡沃切、三部、

〔倭名類聚抄十八羽族名〕鵠　野王按、鵠、胡篤反、漢語抄云、古布、日本紀私記云、久久比、大鳥也、

〔箋注倭名類聚抄七鳥名〕新撰字鏡、鵠、久久比、又古比、按古布古比一聲之轉耳、○略中景行紀、仲哀紀、孝德紀所云白鳥、蓋是、今俗呼白鳥、音讀貝原氏以久久比爲鶴、本居氏以古布古比爲鶴者、並非、○略中

按說文、鴻、鵠也、鵠、黃鵠也、毛詩九罭、鴻飛遵渚、鄭箋云、鴻、大鳥也、不宜與鳧鷖之屬飛而循渚、是詩所謂鴻、卽許氏所謂黃鵠、非鴻雁之鴻、故鄭云爾、顧氏訓鵠爲大鳥、卽謂黃鵠、則不得訓古布、久久比、又按莊子天運篇、夫鵠不日浴而白、漢書司馬相如傳、弋白鵠、顏注、鵠、水鳥也、其鳴鵠鵠、季時珍曰、鵠大于雁、羽毛白澤、其翔極高而善步、是可以訓古布、久久比、源君引玉篇者誤、

〔類聚名義抄九鳥〕鵠胡穀反、コフ、クヾヒ、　鵠クヾヒ

〔下學集上氣形〕鵠クヾと、又云天鵠、又俗云白鳥鵝、